

山口則子先生のご退任にあたって

市 川 伸 一

初めに、先生の研究に関わる御経歴から紹介させていただきます。先生の御専門は、高分子物理化学であります。先生は東京教育大学理学部化学科の御卒業で、卒業研究は高分子研究の先駆者の一人で日本を代表する化学者、小寺明先生の御指導の下でなさいました。卒論のテーマはポリ塩化ビニルの立体規則性の違いが、双極子モーメントの測定値に現れるかどうかを研究することでした。この双極子モーメントというのは高分子の分子特性を知る上で重要な物性の一つですが、先生はその後の御研究にもこの測定を大切な手段として位置づけられております。そして、先生は同研究室の大学院へとお進みになりました。研究のテーマはポリスチレンの理想配位およびその温度変化でした。先生は光散乱などの最新の手法をお使いになって高分子の形態が温度によってどのように変化するかを明らかにした研究を纏められました。

その後、先生は理化学研究所の高分子物理研究室に勤務なさいます。そちらでは高分子希薄溶液の非ニュートン粘性と排除体積効果の研究に従事されました。私は専門分野が異なるので高分子に関しては適切な解説ができないことをお許し願いたいのですが、例えば流体力学で言うところの非ニュートン流体の挙動は現在でも理解が困難な分野でありますので、先生は未知の領域に挑んでおられたことがわかります。実験的にも新しい粘度計測方法を考案なさるなどの功績を残されておられます。

しばらくして先生は恩師の小寺先生が立てた白羽の矢をお受けになって、東京教育大学（その後、筑波大学と改名）に戻られ、学術的な研究を進められることになりました。こちらでは、水溶性高分子、高分子電解質、硝酸セルロースなど幅広い種類の高分子物性の研究を最新の測定装置を駆使なさって進められました。

そして先生には二つ目の白羽の矢が立てられます。1977年、先生は本校に着任されました。その頃、高分子鎖の形態に関する研究は、より精度の高い物性測定方法が望まれる段階に来ておりました。そこで、先生は精度の高い測定装置を組み立て、双極子モーメントの測定精度を飛躍的に向上することに成功なさいました。これは、分析手法の大幅改善によって研究が大きく進むという模範的なよい例であると思います。それはまた、化学の分野の研究者が不得意とする部分でありますので、我々は先生の研究志向を大いに参考にすべきと考えます。更に最近は、その計測手法を生かされて、いろいろな種類のクラウンエーテルの形態の研究に注力なされ、希少な結果を得られておられます。

こうして先生の御研究の経路を辿らせて頂くと、先生がいかに基礎研究を重視なさっているかが伺われます。これは科学全般に言えることですが、最近は基礎が疎かになって、ひたすら応用へと走る傾向が強くなっているため、急増した論文発表件数のわりには基礎的な進歩が見られなくなっていると思います。この基礎重視の姿勢を長い間貫徹なさっておられる先生の研究思想に共感を覚えると同時に、見習いたいと思っております。

ここで、先生の教育活動について、僭越ではございますが少し触れさせていただきます。本校の化学系科目として用意されたものは、実に多彩です。従いまして授業の準備にはかなりの時間を要するものである一方、学生にとっては豊かな教育を受けられるようになっています。先生はその仕組みを構築なさいました。先生は共通科目もご担当なさってきておられますが、異なる分野の学生に科学を教える場合、正に本校の特長でありますリベラル・アーツ教育の多様なアプローチを駆使して行なう必要があると思われまふ。これは科学というものを広く文系の視点も取り入れて教えるということですが、先生は積極的にこれらの授業に取り組まれて、今日の自然科学系を含む共通科目の体制を築いてこられました。教室外では、人望のあつゐ先生の部屋に悩みを抱えた学生が相談に来ることがしばしばあったことは、先生の幅広い教育者としての一面を覗かせておられます。

先生は本校の重要な任務にいくつか就かれていらっしゃいました。中でもご退任直前までお忙しくなさっておられた図書館長のお役目は私どもの記憶もあらたなところですし、教務委員長を二度もなさっておられます。そのお人柄と、問題解決をしながら前進するお力を持っておられる先生ならではのお役目と拝察致します。

昨年の7月、先生の研究室で大事な案件について先生からアドバイスを受けておりました時に、一匹の蚊が近づいてきて、私を刺しました。そして話に夢中になりながら、時間が経過してゆくうちに、不思議な現象に気がついたのです。その蚊は私ばかりを集中攻撃して、先生の方には近寄らないのです。後で調べてみますと、蚊は人間の皮膚から排出される二酸化炭素に寄ってくる習性があるのだそうですね。また、人間は緊張すると二酸化炭素の排出量が増加するらしいということもわかってきました。つまり、私は時間と共に次第に緊張が高まる一方で、先生は冷静沈着、落ち着いてお話をなさっておられたのであります。私が退室した後、先生はその蚊を両手のひらでつくる籠の中に捕らえて外まで持ち運び、放ってあげたのです。会話中の先生は、相手の立場や気持ちを察してご発言なさいます。私は、そのお心づかいにいつも感謝しております。しかもその間、先生の二酸化炭素の排出量は定常状態に保たれるのであります。

28年の長い間、東京女子大学のために御尽力頂いたこと、そして化学研究室を守り続けて下さったことに感謝するとともに、これからも我々後進のアドバイザーとして御指導願えれば幸いです。